

# 1世紀前の入管記録・発見！

あおやま あきら  
青山 士のアメリカ入国記録，初めて見つかる

高崎哲郎

TAKASAKI Tetsuro  
(独) 土木研究所客員研究員・作家

## 三度目の正直

戦前の内務省土木局を代表する技術官僚で第23代土木学会会長を務めた青山士(1878~1963)は、東京帝大土木工学科を卒業すると、主任教授広井勇や信仰上の師内村鑑三の助言を受けて単身アメリカに渡った。青山は同期の学生たちにパナマ行きを呼びかけたが、一人も呼びかけに応じなかった。渡航費は自ら捻出したが、最終目的地ワシントン州シアトルまでの旅費が確保できず、最終目的地一歩手前のカナダ・ヴィクトリアでやむなく下船したとされている。

アメリカ政府が中南米の地峡パナマに計画した「今世紀最大の土木事業」運河開削事業に参加するためであった。自らもアメリカに渡り働きながら学んだ経験を持つ恩師広井は滞米時代に友人となったコロンビア大学土木工学科ウィリアム・H・バア教授への紹介状を青山に託した。

バア教授は当時アメリカ政府パナマ運河委員会の技術顧問であった(広井と内村は札幌農学校(北大前身)同期で敬虔な「サムライ」クリスチャンであり、その教えを受けた青山もクリスチャンであった。またバア教授もプロテスタント系クリスチャンで、日本人留学生を数多く世話したことで知られる)。

青山が唯一の日本人技術者として熱帯雨林の中での巨大プロジェクトに参加してアメリカ技術陣から高い評価を受けたこと、「灼熱地獄」のパナマでの7年半の苦闘が帰国後に内務技師となった青山の心を支えたことはよく知られている。

私は目下執筆中の『評伝・工学博士広井勇の生涯』(鹿島出版会、この秋刊行予定)を書き上げるため最終調査として今年5月アメリカを訪ねたのだが、最初の訪問地シアトルで1日の時間的余裕が出来た。そこで私は「長年の未解決課題」に挑戦しようと思った。それは青年青山士がこの地に日米をつなぐ国際航路で到着したのは間違いのないことから、北米大陸第一歩を印した史実を裏付ける入国管理(入管)記録をどうにかして入手できないかとの焦げつくような思いである。



写真-1 青山士肖像(パナマ運河時代。「写真集青山士/後世への遺産」山海堂より)



写真-2 青山が乗船した旅順丸(「写真集青山士/後世への遺産」山海堂より)

実はシアトルでの青山足跡確認の作業は今回が初めてではない。10年前に『評伝 技師・青山士の生涯』(講談社)を刊行する際にもシアトル市とワシントン州の公立図書館や公的機関それに在米日本人会などで調査をして回った。刊行後にも同様の現地調査をしたのだが、結局は何の成果も得られないまま今日に至っているのであった。

「今年が青山アメリカ入国から100年、1世紀であり、

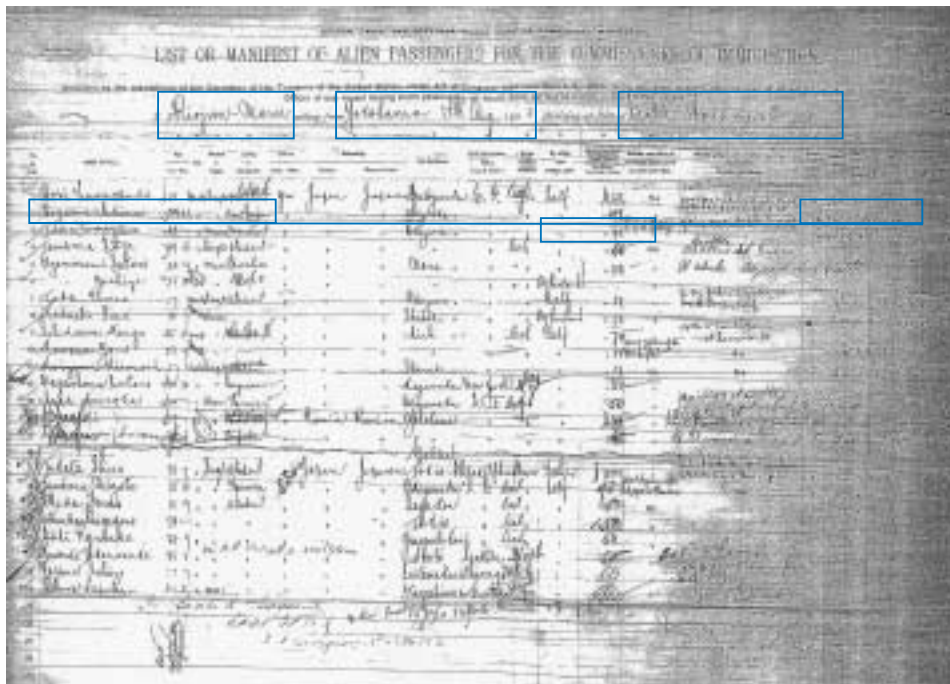


写真-3 旅順丸の乗船者名簿（アメリカ国立公文書館（シアトル）・提供）

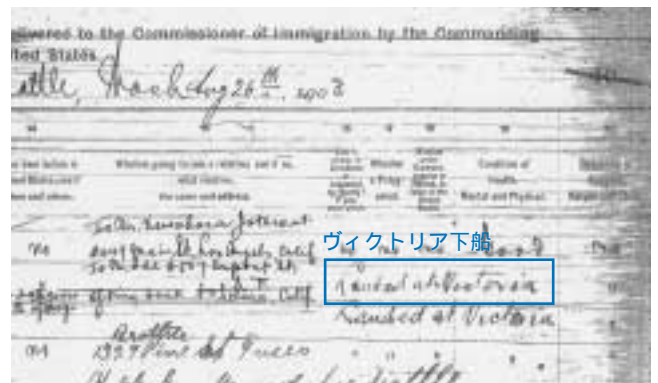
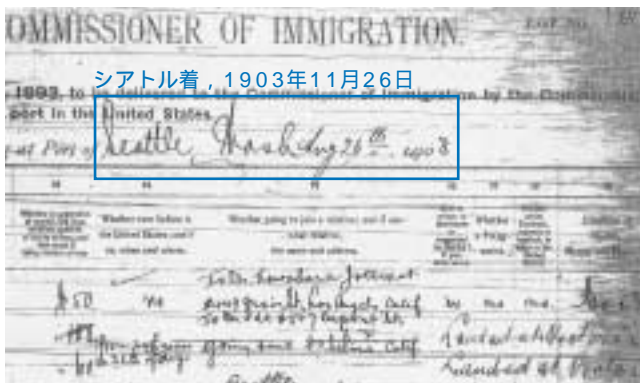
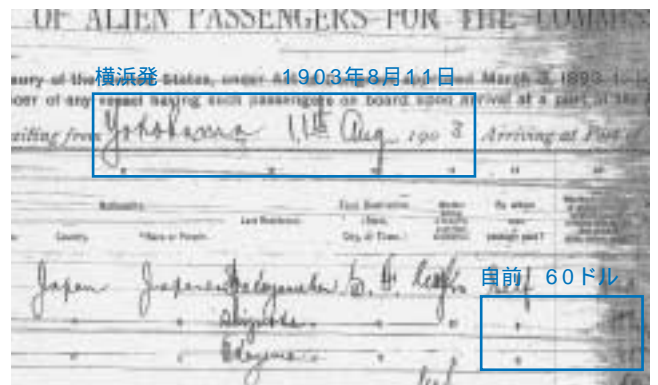
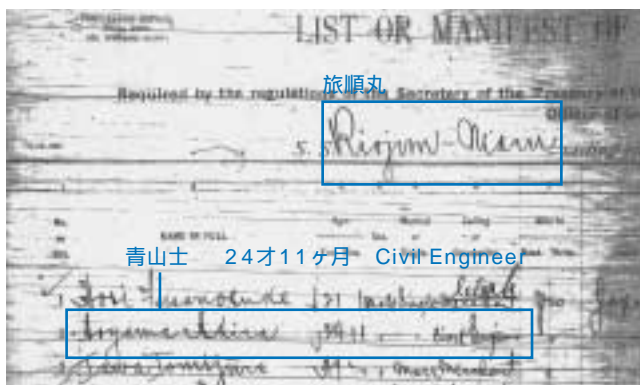


写真-3の拡大部分

今回の調査でも何の手掛かりも得られなかったら、きっぱりとあきらめよう」

私はそう誓った。三度目の正直。三度目の現地での挑戦である。しかも今回がこれまでで最も時間が限られていた。

入管記録を発見！

調査に費やせるのは1日だけ、実質5時間から6時間程

度である。同行の英会話に堪能な友人 N 工学博士にレンタカーのハンドルを握っていただき、ホテルに近いシアトル市立図書館にまず出かけた。ここは以前も訪ねていたの、これまでとは異なった方法の資料請求を試みたが、やはりダメだった。

「Very sorry！」

カウンターの中年女性は繰り返した後、市内のワシントン

ン州立大学図書館か公文書館を訪ねてはどうかと助言してくれた。立ち止まってはられない。車の中で昼食をほお張りながら、早速車を走らせて同大学図書館に出向いた。「東アジア・ライブラリー」の日本担当女性司書は積極的に支援の姿勢を示してくれて、館内の関係資料をすべて検索するとともに日米関係専門の教授を紹介してもいいと言ってくれた。

「明日シアトルを発たねばならないので教授に会うことは残念ながら時間的余裕がありません」

そう答えると、彼女は思いついたように声を上げた。

「国立公文書館がシアトル郊外にあるので、そこに古い入管記録が残されていると思う。直ぐ行ってみてはどうですか。閉館時間が迫っています。電話をかけておきましょう」

最後の望みを託して、ロードマップと首っ引きになりながらレンタカーを飛ばして文書館にたどり着いたときには閉館まで30分程度しか残されていなかった。

「閉館時間は余りにしなくてもいいですよ」

担当の女性アーカイヴィストは、事前に電話連絡があったことから、こう言ってくれた。配慮に感謝しながら、焦る気持ちを抑えて作業に取り掛かった。

山と積まれた膨大な入管記録（マイクロフィルム）の中から、青山が入国した1903（明治36）年8月のフィルム・リールを少しずつ回転させて入念にチェックしてみた。これだけでも数巻もある。残念ながら見つからなかった。私は青山土の特徴ある書体（英字のサイン）を思い出しながら何度もマイクロフィルムを回してみたがダメであった。閉館時間も近づいているしあきらめるしかない、そう覚悟した。

最後に、青山が乗船した船が日本郵船所属の「旅順丸」であったことを思い出し、8月に入港した「旅順丸」の乗船名簿か入管記録だけをチェックしてみた。閉館時刻まで数分に迫った。

私は驚いて、リールを回転させている指を止めた。背筋に冷や汗のようなものが流れた。

「Aoyama Akira」。乗船者名簿の上から二番目に見つけたのだ。嬉しかった。叫びたいような気持ちだった。初めて青山のアメリカ国内の足跡を記す公文書を見つけたのである。ようやく巡り会えたのである。

若きCivil Engineer

「乗船者名簿」（「LIST or MANIFEST of ALIEN PASSENGERS」）によれば、旅順丸（「Riojima - Maru」）は8月11日に横浜港を出て、同月26日シアトル港に入港した。日本人乗客は24人で、若者が多く学生も数人含まれている。

Aoyama は24歳11か月で、「Civil Engineer」（土木技術者）とはっきりと記している（わずかに2か月前までは大学生だった）。若き土木技術者である。「Shizuoka」の出身である（青山は今日の静岡県磐田市の生まれである）。英語の読み書きはできる、と記されている。渡航費は自前とあり、シアトルの手前の寄港地であるカナダ・ヴィクトリアで下船したと記されている。確認済の情報通りであった。

シアトルまで来て上陸していることを考えると、船長が同船者が日本人青年の旅費を支援して最終目的地まで到着させたのではないかと考えられる。当時の入管手続きは、アメリカ政府の入管職員が接岸した客船に乗り込んで、船長の手渡す乗船名簿を見て一人ずつチェックし所持品などの検査をした。急増する東南アジアからの移民にまぎれこんで不法入国する中国人らに神経を尖らせていた（「Aoyama Akira」の英字は明らかに青山直筆のものではない）。私と同行のN博士が夕日の射しこむ資料室で発見を喜んでいて、担当した女性たちもわがことのように笑顔をつくって喜んでくれた。マイクロフィルムを拡大コピーしてくれた。代金はいらぬという。私のように史実を調査して文章を書くことを生業なりわいにしている者にとって、小さな史実でも確認できたときの喜びは何ものにも代えがたい。いわんや外国の地で確認できたときには最高の喜びである。

歴史資料は誰のもの

私は今回の取材で「アメリカでの最大の情報源は図書館や資料館である」との思いをあらためて深くした。それは単に資料や文書類が多数きちんと整理・保存されているからだけではない。そこで働く司書やアーカイヴィスト（その大半が女性であった）の献身的とも言える協力姿勢を考えるのである。そこには、われわれ外国人であっても最大限のサービスをしようとするプロに徹した奉仕精神があることを忘れてはならない。今回は北部を中心に10か所ほどの大小図書館（大学図書館も含む）や公文書館を訪ね資料収集にあたったが、事前に調査目的や要求資料をE-mailで伝えておいたこともあって、資料収集は当初の予想を上回る成果となった。アメリカ国内のどこの図書館や公文書館であっても担当者の熱意やサービス精神を感じないところは一箇所もなかった。歴史資料や公文書類は誰のものであるか。言うまでもなく国民のものであり、広く人類のものである。国民に開かれ活用されて当然のものである。国籍と国境は調査・研究の情熱や学問的良心の前には全く意味をなさない。ひるがえってわが日本の現状はどうだろうか？お寒い限りでなければいいのだが...